

新潟県北部言語接触地域における方言音声の経年比較

— 1 高年層話者のガ行入り渡り鼻音の実態に即して —

大橋 純一

A Time-Based Comparison of Dialect Pronunciation in the Language Contact Area of Northern Niigata Prefecture: On-Glide Nasal [ŋ] Sounds among Elderly Speakers

Junichi OHASHI

Abstract

Northern Niigata Prefecture is located along the boundary line where two different dialects come into contact, the Tohoku dialect to the north and the Echigo dialect to the south. Due partly to this geographical configuration, archaic pronunciations of Japanese have been preserved in the area, including on-glide nasal [ŋ] sounds ([^oŋ]-[[~]ŋ]) seen almost nowhere else in Japan. Based on the distribution of nasal [ŋ] sounds in the Tohoku dialect and plosive [g] sounds in the Echigo dialect, the [^oŋ]-[[~]ŋ] sounds of this area seem to have been preserved from the archaic pronunciations of these dialects. In order to determine the influence and specific transition of neighbouring areas upon these pronunciations, in 2003, the author conducted a general survey of the entire region. In this work, I conducted a follow-up survey of elderly speakers, performing a time-based comparison to determine the changes that had occurred over the course of approximately ten years. The comparison of the results of the two surveys demonstrates that while there was no significant decline in [^oŋ] and [[~]ŋ] sounds, there were particular trends in the pronunciation of each syllable. For instance, a [g] pronunciation not seen in other syllables tended to show up in the case of /gi/, and this survey did demonstrate the presence, albeit limited, of a pronunciation resembling [ŋ] in which nasal sounds make an extremely brief appearance.

キーワード：新潟県北部，言語接触地域，方言音声，経年比較，ガ行入り渡り鼻音

Key Words : Northern Niigata Prefecture, Language Contact Area, Dialect Pronunciation, Time-Based Comparison, On-Glide Nasal [ŋ] Sounds

1. はじめに

『日本言語地図』第1集の1・2図（「カガミ（鏡）」「カゲ（蔭）」）を見ると，新潟県北部の3地点に，全国的にもほとんど類例のない [^oŋ] ないしは [[~]ŋ] の分布が確認できる。^{注1} これらは「国語史上，中央日本語の古い発音とされている」（同地図解説 p. 1）ことからすれば，そうした歴史的な古音が現在，新潟県の一小域に特立していることになる。

一方，上記の3地点は，いずれもそれ以北の [ŋ] 域と以南の [g] 域とが接する境界線上に位置している。またその境界は，諸家の方言区画論でいう東北方言と越後方言の境界ともほぼ重なっている。^{注2} 当3地点の分布は，おそらくは周辺で生じた [ŋ] 化（東北化）と [g]

化（越後化）^{注3} の狭間にあつて，そのどちらにも行きかねて取り残された，いわゆる古態残存の姿を反映しているものと解することができる。新潟県北部が旧来より，そうした言語特徴の接触地域として，またそれに付随する古態残存地域として，様々に注目されてきた所以である。

ところで，当域で [^oŋ] や [[~]ŋ] を示すのは，既出の『日本言語地図』においてこそわずかに3地点であるが，実際に現地へ赴くと，その痕跡が思いのほか広範囲にみとめられることがわかる。^{注4} ただし，どの地点にも大差なく安定的にそれらが現れるかといえは，必ずしもそうとはいえない。むしろ介入する鼻音の度合いや頻度は地点ごとに，また対象とする語や発音によってもかなり異なる。その意味において，当域の [^oŋ] ~ [[~]ŋ] は，周辺

の [ŋ] や [g] と明確に対立する関係にあるというよりは、むしろその両勢力と接しつつ、ちょっとした拍子で [ŋ] にも [g] にもなりかねない過渡的段階にあると見るのが妥当である。

上記のような現状の把握を踏まえ、筆者は既に2003年に、それらの実相と分布の詳細を明らかにするための調査、具体的には当域の全行政区画36地点を対象とする音声の現地調査を行っている。^{注5} またその成果の一部を大橋(2004b)(2007b)などで明らかにしている。この調査(以下「前調査」)以来、約10年の歳月が経過した。筆者はこれを機に、前調査からの変化の様相を捉えることを主眼として、同域を対象とする地理的・年代的な調査を現在進めているところである。本稿は、その枠組みの中ではあくまで予備考察的な位置づけになるが、前調査で既に [ʰg] ~ [ḡ] の現れ方に揺れのあった1高年層話者の実態を追跡調査し、経年比較することを通して、当事象の動態の一端を探ろうとするものである。

2. 前調査の結果(大橋2004b)の概要と本稿の狙い

既述のとおり、前調査では当域の行政区画より36地点を選定し、音声事象に関する現地調査を行った。大橋(2004b)では、その中のガ行入り渡り鼻音について、まずは音響分析による [ḡ] その他の客観的究明を行い、それらの地理的分布を把握した。また同時に、各実相の出現傾向、鼻音の介入があるものについてはその持続時間について、主として音環境の見地から追究を行った。結果の概要は次のとおりである。

- i. 当域に現れる実相のタイプには、大きく“a. 非鼻音系”のものと“b. 鼻音系”のものとがあり、その各々はさらに“a: 破裂音 [g] / 摩擦音 [ɾ]”および“b: 鼻濁音 [ŋ] / 入り渡り鼻音 [ʰg] / 小入り渡り鼻音 [ḡ]”に細分類される。^{注6}
- ii. 以上を分布の上から見ると、対象域の中北部を中心に、全語 [ʰg] ([ḡ]) で現れるものが7地点、他音との揺れを示しながらも [ʰg] ([ḡ]) で現れるものが12地点ある。また全語 [ŋ] で現れるものが3地点に過ぎない一方、[g] (一部 [ɾ]) は阿賀野川以南を中心に、全語それで徹底するものが14地点みとめられる。
- iii. 以上からは、[ʰg] ([ḡ]) の分布が今なお当域に多数みとめられること、しかしその多くが他音との揺れを示す現状にあること、対立する [ŋ] と [g] とでは [g] の方が優勢であることなどがうかがえる。これらは、つまるところ、[ʰg] ([ḡ]) の現れ方が全般に過渡的であると同時に、その過渡の実情が主として [g] 化によって生じている可能性を示唆し

ている。

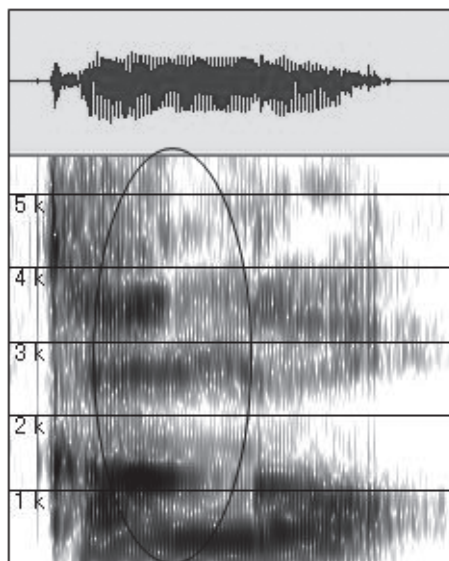
- iv. 各実相の出現傾向を音環境の見地から見ると、おおむね次のような点が指摘できる。
 - イ. 当該音節が /ge//go//ga/ の場合に [ʰg] ([ḡ]) となるものが多く、/gu/ がそれに次ぎ、/gi/ の場合に [g] (一部 [ɾ]) となるものが多い。
 - ロ. 一方、/g/ に前・後接する母音の広狭に着目すると、前後の母音で広狭の変動がないもの (/Vw gVw-/・/-VN gVN-/ 構造) よりはあるもの (/VN gVw-/・/-Vw gVN-/ 構造) の方に [ʰg] ([ḡ]) 出現の割合が高い(ただし当該音節が /gi/ のものは除く)。
 - ハ. 同様のことは介入鼻音の持続時間にもうかがえ、[ʰg] に現れるものには /VN gVw-/・/-Vw gVN-/ 構造、[ḡ] に現れるものには /Vw gVw-/・/-VN gVN-/ 構造の語が多い。

本稿では、以上の究明点をもとに、全36地点の中から北蒲原郡加治川村下中(現新発田市下中)の1高年層(前調査時72歳/本調査時83歳)を追跡調査する。当地点は、上記のiiでいう「他音との揺れを示しながらも [ʰg] ([ḡ]) で現れる」地点のひとつであり、前調査時において既に [ʰg] ([ḡ]) からの過渡的状況をうかがわせるものだった。この地点・話者が、およそ10年という歳月の中で、上記のような結果の概要からどのような推移の実態にあるのかを以下に検討していく。

3. 発音の現状——音響的実相

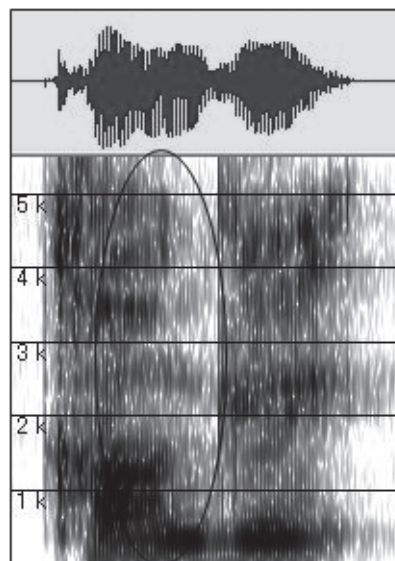
前調査時において、当話者の発音には、入り渡り鼻音 [ʰg]、その鼻音要素が相対的に弱まったと見られる小入り渡り鼻音 [ḡ]、ならびに破裂音 [g] の三様が確認されている。結論からいえば、本調査でもその結果に大差はない。つまり、[ʰg] や [ḡ] の鼻音要素が [g] と融合して [ŋ] 化したり、逆に脱落して [g] 化を極端に推し進めていたりといった変化の様相は目立ってはみとめられない。以下には、各実相のスペクトログラムを対照し、現状においてもなお [ʰg] や [ḡ] の発音が明確に現れうること、その中であって [g] の発音が調査語を違えるなどしてやはり明確に現れうることを客観的に検証する。

図1~図3のスペクトログラムは、各発音に要した持続時間(横軸・msec)とそれに対応する周波数帯域(縦軸・kHz)を視覚的に捉えたものである。分析はいずれも「音声録聞見」(WIDE分析)によっている。囲いで記したとおり、ここでの注目箇所は、前音節末の母音から当該子音にかけての調音区間である。音響学的な知見によれば、[ŋ] は同箇所にも複数のスペクトルピークを有



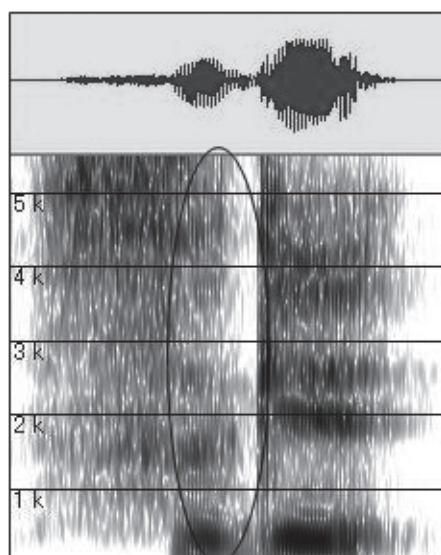
k a () g o

図1 籠 /kago/



k a () g e

図2 蔭 /kage/



s u g i

図3 杉 /sugi/

すること、中でも特に低周波に強い共鳴 (nasal formant) を持つこと、よってその音響的特徴は母音のそれとよく類似することなどが知られる。一方の [g] は呼気の閉鎖に伴う無音空白区間 (gap) が存在すること、また有声音の証左としてその下方に低周波のエネルギー帯域 (voice bar) が現れることなどが知られる。つまり介入鼻音の有無は、ここでは低周波帯域の様相とそれから上方にかけての音響模様とによって規定されることになる。

それらを踏まえ、改めて図1～図3を見ると、まず図

1・2と図3が囲い部分の横軸において費やす時間幅を大きく異にしていることがうかがえる。つまりそのことは、図1・2の囲いの箇所に介入する何らかの調音があること、逆に図3にはそれが無いことを物語っている。さらにその音響模様を縦軸に沿って見ると、図1・2が各々の低周波帯域に前接母音と類似するフォルマントを呈していること、またそれに引き続き上方の2.5kHz近辺を中心に同様のフォルマントを呈していることがわかる。これらは、いずれも上記で規定するところの鼻音の特徴を指し示すものである。それに引きかえ図2では、

低周波帯域からその上方にかけて、基本的には無音の状況を表す空白模様が広がるばかりである。以上から、介入鼻音の有無に関しては、それを有する図1・2と有しない図3との間に音響的な差異のあることが明瞭である。

しかし一方、図3との対比から大きく鼻音系発音とみとめてきた図1と図2の間にも、特に横軸の時間幅に関しては、相応の差異があることをみとめなければならない。フレームシフト幅を固定しての分析にも関わらず、まず視覚的に見て、前接の/a/から/g/にかけての距離感はかなり異なる。実際、当該箇所(/a/の起音から/g/の破裂部まで)の持続時間を計測してみると、図1が310msec、図2が223msecと、両者の間には約90msecの差がある。つまり図1の介入鼻音がほぼ一拍分にも迫る性質のものであるのに対し、図2のそれは明らかにその度合いを弱めた状況にあることが見てとれるのである。

これらの対比からもうかがえるとおり、当話者の発音の現状には、図1～図3に象徴されるような入り渡り鼻音 [ʰg], 小入り渡り鼻音 [˘g], ならびに破裂音 [g] が同居している。つまり前調査段階で既に過渡的であったとされる当話者は、おおよそその過渡の状況を維持しながらも、結論的には [ʰg] 等の入り渡り鼻音をほとんど変わらずに保持しているということがいえる。

4. 各実相の調査語別・発音別による出現状況

次には、上述の各実相がどのような語に、どういった発音の頻度で現れるかを一覧してみる。表1は、次に記すような主旨・内容を反映させつつ、前調査と本調査での発音結果を対比的に見たものである。

- ・調査では1語につき2～4回の発音を求めている。表にはその各実相を発音順に、それぞれ以下に記すような記号に置き換えて表示する(空欄はその語においてその回の発音が無いことを示す)。なお [˘g] に聞き取れたもののうち、その度合いがとりわけ小さく微妙であるものについては括弧を付して (・) のように記す。

* : [ʰg]	・ : [˘g]	- : [g]
----------	----------	---------
- ・前調査では2003年8月に1回、本調査では2014年6月と9月に2回、調査を行っている。本調査の発音回数が前調査よりも多いのはそのためであるが、ここでは本調査の2回分を区別せずに一括して示す。
- ・調査語には、前調査から削除したものと本調査から新しく加えたものがある。ここでは比較の見地から、両調査で共通する調査語のみを扱う。また/g/

が特殊音に後接する語や複合語(たとえば「雨傘」/amagasa/など、複合結果として/g/が生じたもの)など、ある見たい観点が、特別な意図を持って設けた調査語もここでは除外する。

表1より読み取れることは、主には次のような点である。

- 1) 語や発音によって [ʰg] ~ [g] がランダムに現れる状況は、前調査と本調査とにおいてさほど大きな差異はない。
 - 2) 大局的なこととして、前調査で [ʰg] や [˘g] に現れる傾向にあるものは本調査でもそのように現れる傾向が強い。同様のことは [g] についてもいえる。
 - 3) つまり、前調査段階でその現れ方に揺れのあった(それによって [g] 化への過渡的状況が疑われた) [ʰg] ([˘g]) であるが、その動きは本調査に至って必ずしも徹底されているとは見なされない。
 - 4) そればかりか、全発音に対する [ʰg] ([˘g]) の出現比率は、前調査→61%、本調査→67%であり、ほぼ同様の状況が維持されているか、むしろ本調査にかけて出現の頻度が増しているとさえ見うる。
 - 5) そのことは、たとえば前調査で一度も [ʰg] ([˘g]) に現れることのなかった「釘」、「杉」、「おはぎ」といった語に、頻度こそ少ないながら、新しく [ʰg] ([˘g]) の発音が出来していることなどからもうかがえる(ただし「磨く」や「山羊」のように、本調査で逆に [g] 化が徹底したかに見えるものもあり、その動きは一様ではない)。
 - 6) さらに、介入鼻音の長短の見地から、より介入幅が明瞭な [ʰg] の出現比率(具体的には [ʰg] + [˘g] を母数とする中で [ʰg] に現れるものの比率)を見た場合にも、優勢なのはむしろ本調査の方である。前調査→68%、本調査→73%
 - 7) しかし一方、本調査には、前調査にはみとめられなかった(・)の発音が3箇所を確認できる。上記のとおり、これらは [˘g] に聞き取れたもののうち、その度合いがとりわけ小さく微妙であるもの」の類である。つまり6)の指摘事項とは逆の方向性を示すものであり、また前調査にはみとめられなかった事象であるという点において、本調査に特立する特徴のひとつであるといえる。
- さて、以上を踏まえて大局的にいえることは、当話者の発音の実態が、前調査から本調査にかけて、それほど大きくは変わっていないということである。既に過渡的であった [ʰg] ([˘g]) は、本調査でも変わらずに過渡的であることが基本であり、他音との揺れはあっても、特段に衰退したことを印象づけるものはない。それは [g]

表1 前調査と本調査における発音の実態

* : [ʰg] · : [˘g] - : [g]

音節	調査語	前調査				本調査						
		1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7
/ge/	蔭	·	-	-		*	*	-	*	-	*	*
	とげ	*	-	*		·	-	*	-	-		
	髭	*	-	·	*	*	*	*	*	·	*	
	お告げ	-	-	·	-	-	*	*	*	-	*	
	上げる	*	*	*	*	*	*	*	*	*		
/go/	籠	*	·	*	*	*	*	*	*	*	*	
	顎	*	*			*	*	*	*	*		
	午後	*	*			*	*	*	*	*		
	囲碁	*	·	*		-	·	(·)	*	*	*	
	苺	·	-	-	·	·	(·)	·	·	-	·	·
/ga/	鏡	-	-	·		*	-	·	-	·	*	
	いが	-	*	*		-	·	-	-	·	·	
	磨く	·	-	·	·	-	-	-	-	-	-	
	上がる	-	*	*		*	*	*	*	*		
	うがい	-	*	*		*	*	*	*	*		
/gu/	継ぐ	-	*	·		*	-	-	-	*	*	
	嗅ぐ	·	*	*		*	*	-	-	*	-	*
	漕ぐ	*	*	*		*	-	-	*	*	*	
	うぐいす	*	-	-	*	*	-	-	*	-	*	
/gi/	釘	-	-	-		·	-	-	·	*		
	杉	-	-	-		·	-	·	-	-	-	
	鍵	·	·	-		·	*	*	·	-	*	
	山羊	*	*	-		-	-	·	-	-	-	
	おはぎ	-	-	-		(·)	-	·	-	-	-	·

の場合についても同様である。また、それらの揺れないしは過渡的とされる状況も、前調査と本調査を通じて、基本的には2)に記すような傾向性に抛りつつ生じていることがわかる。その意味では、[ʰg] ~ [g] がランダムに現れる1)のような状況も、決して無秩序や混沌の事態を想定させるものではなく、当人なりの安定した発音傾向が前提となっていることがうかがわれるのである。つまりこの経年比較においては、揺れがある中でも[ʰg] ([˘g]) や [g] の現れ方に一定の傾向性がみとめられること、またそれが経年によってもそれほど大きくは変わらないことが、まずもって特筆されなければならない第一の点となる。

しかしその一方で、5)や7)のように、本調査において新しく出来する事象のあることにも注意が必要である。また、2)や5)でいう「[ʰg] ([˘g]) に現れる傾向が強い」や「[ʰg] ([˘g]) に現れることがない」といった状況が、具体的にどのような音節等の条件において生じているかについても把握が必要である。よって上記に得られた知見をもとに、以下には、各実相の音環境別の出現傾向、介入鼻音の長短、また本調査に特立的に現れ

る(·)の具体相について、さらに詳しく見ていくことにしたい。

5. 各実相の音環境別の出現傾向

「2-iv-イ」によれば、当地方言では、

当該音節が/ge//go//ga/の場合に[ʰg] ([˘g])となるものが多く、/gu/がそれに次ぎ、/gi/の場合に[g] (一部[x])となるものが多い

傾向があるとされる。表1は便宜的にこの順で整理しているが、一覧すると、まずは/gi/の場合に上記の全域的な傾向とほぼ重なる事態、つまりはこの音節に限り一定頻度で[g]が現れる傾向が指摘できる。確かに「釘」、「杉」、「おはぎ」等、本調査に至って[ʰg] ([˘g])の発音を出来させるものがあり、その点では前調査からの新しい動きを予見させもするが、調査語全体の中で[ʰg] ([˘g])に現れるものの比率を見れば、やはりそれ以外の音節の比ではないことが明瞭である。

一方、/ge//go//ga/および/gu/に関していえば、上記どおりの序列ではないまでも、/gi/の場合とは対照的

に、当該の4音節に共通して、また前調査・本調査に共通して、[^og] ([^hg])に現れる傾向が強い。「磨く」など、/ga/の一部に[g]を頻出させるものもあるが、同音節の「上がる」や「うがい」が本調査時に一貫して[^og]に現れていることなどからすれば、単に音節条件のみに付随している現象とはみとめがたく、個別の語の事情によるところが大きいものと思われる。

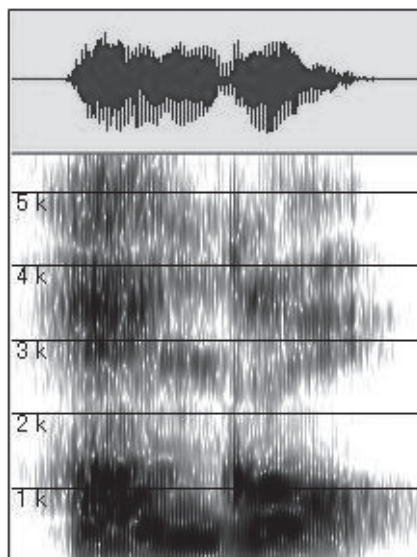
なお「2-iv-ロ」に即するならば、当域方言には、さらに/g/に前・後接する母音の広狭にも着眼の余地があり、

前後の母音で広狭の変動がないもの(/-VwgVw-/・/-VNgVN-/構造)よりはあるもの(/-VNgVw-/・/-VwgVN-/構造)の方に[^og] ([^hg])出現の割合が高い

傾向があるとされる。しかし、表1からもうかがえるとおり、当話者の発音において[^og] ([^hg]ではない)が突出して現れるのは、「上げる」、「籠」、「顎」、「午後」、「上がる」等、むしろ母音変動がない/-VwgVw-/構造の語の場合であり、その点に積極的な相関関係をみとめることはできない。

以上を総合すると、各実相の音環境別の出現傾向は、より単純化して

/gi/の場合が[g]に、^{註7} それ以外は[^og] ([^hg])に現れる傾向が強い



a ŋ g o
図4 あご /ago/

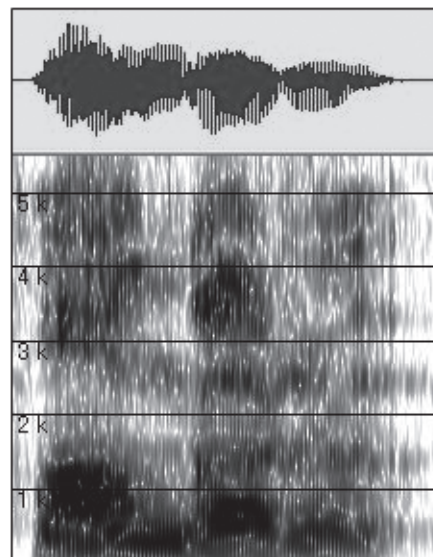
とまとめることができる。なおそれ以外の4音節 (/ge//go//ga//gu/)には出現頻度等に関する際立った序列差はなく、そこに突出する傾向または異傾向のものがあるとすれば、それらは主として個別の語の事情によるところが大きいと結論づけられる。

6. 介入鼻音の長短と音環境との相関

「2-iv-ハ」によれば、上記するような音環境は、介入鼻音の長短の差（つまりその実相が[^og]であるか[^hg]であるかの差）にもある程度関わり、

[^og]に現れるものには/-VNgVw-/・/-VwgVN-/構造、[^hg]に現れるものには/-VwgVw-/・/-VNgVN-/構造の語が多い

傾向があるとされる。しかしこれについては、上項の「5」で積極的な相関がみとめられなかったことと連動して、当観点に関しても、その傾向を明確に指摘することはできない。しかし一方、鼻音の介入幅に着目する中で、明らかに“長”と認識できるものはやはり確実に存在する。既見の図1がその典型であるが、それ以外にも、たとえば次に掲げる図4・図5など、[g]の直前に鼻音の介入があること、かつその幅が特段に大きいことを客観的に検証できるものが見られる。



a ŋ g a r u
図5 上がる /agaru/

鼻音の存在がどのような音響的特徴により規定されるかは、既に「3」の分析において詳述しているので、ここでは改めては触れない。要するにこの2図で注目したいのは、/a/と/g/の間を埋める鼻音の調音区間、それ

を他音節との比較において見た場合の相対的な長さに関してである。そこで、先の図1（「籠」）に倣い、まずは/a/の起音部～/g/の破裂部までの持続時間を計測してみる。すると図4（「あご」）が288sec、図5（「上がる」）

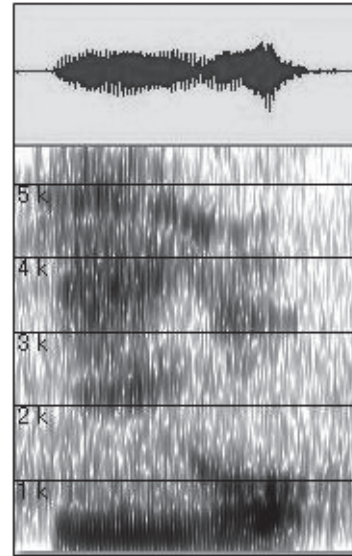
が285msecとなり、ともに図1(310msec)に準じる長さであることが客観的に読み取れる。またそうした実測によらなくとも、音節の各所を視覚的に見比べれば、鼻音相当区間が前接の/a/や後接の/go//ga/とほとんど遜色がない程度の時間幅であることが見てとれる。つまり、「注6」にも記したように、これらの鼻音介入は、実際には[ŋ]とも表記されうるほどに幅広く明瞭であることがうかがわれるのである。

ところで、当発音に相当する事例として、ここには既見の「籠」のほか、「あご」、「上がる」の例をあげているが、これらの語が実際にどのような発音の実態にあるかを表1(本調査)に立ち返って確認してみる。すると、いずれも複数回ある発音において、その全てが[ŋ]で徹底する類の語であることがわかる。またこれ以外にも、たとえば「上げる」、「うがい」、「午後」、「漕ぐ」といった語に同様の発音がみとめられることからすれば、自ずとその傾向は明らかとなる。つまり当話者の場合、介入鼻音が“長”に現れることの条件は、詳細な音環境の差に求められるというよりは、その語がいかに[ŋ]を安定的に出現するかという、発音全体の持続度・定着度の差に求められるということがいえる。言い換えるならば、介入鼻音の長短はおおよそ[ŋ]の出現比率に比例するものと考えられ、[ŋ]の出現が持続的・安定的であるものは、それだけ鼻音の介入幅も大きくみとめられがちであるという相関を指摘することができる。

7. 本調査に特立する発音の音響的特徴

以上のように、当話者の発音には、鼻音の介入幅が特段に大きく明瞭なものが存在する一方で、本調査時にはそれとは対照的に、[ŋ]の中でもその度合いがとりわけ小さく微妙であるものが特立する。すなわち表1に3箇所みとめられる(・)がそれである。「注6」にも定義しているとおり、本稿にみとめる[ŋ]は、介入鼻音の長短レベルからいえば、それ自体既に“短”であるが、ここにあって(・)のレベルをみとめるのには理由がある。すなわちこれらの発音に接し、実際に鼻音要素にあたるものが極端に短く聞かれること、またその直後の破裂調音(つまりは[g])も明確には聞き取りにくく、実相の判断が難しいことなどによる。そこで以下、音響分析を施し、(・)に分類されるものの具体相を検討してみる(参照、図6)。^{注8}

これによれば、/i/の末部から/g/にかけての調音区間に低～高周波帯域にまたがるいくつかのフォルマントが確認でき、まずはこの箇所に鼻音の調音が介在していることがわかる。しかしその時間幅は前接の/i/などと比べるとかなり狭く、また[ŋ]や[ŋ̥]で見えてきたも



i ŋ o

図6 困碁 /igo/

のほど独立的ではないことも同時にうかがえる。つまりその点では、先に記した「極端に短く聞かれる」や「その度合いがとりわけ小さく微妙である」といった聴覚的な印象も、それなりに実態の特質を言い当てていたということがいえる。ただ、ここでそれ以上に注目しなければならないのが、/g/から後接の/o/にかけての調音区間である。その区切りの箇所に着目すると、当発音には、先の図1～図5には共通して現れていた破裂調音(その証左となる針状の音響模様<spike>)の痕跡が明確にはみとめられない。/g/を介し、前接の/i/から後接の/o/へと通じていく過程はむしろ連動的でさえあり、そこに閉鎖や破裂を伴う[g]の調音があることは想定しにくいというべきである。とすると、聞き取りが難しく、実相の判断をひとまず保留してきた(・)であるが、その実情は、鼻音の介入幅を狭めつつ独立させた(あるいは[g]と融合して成った)鼻濁音、または小鼻濁音でもいべき性質のものであったことがうかがえるのである。

ところで、ここに問題とする(・)の発音が、上述するように、実質[ŋ]の性質を担うものであるとするならば、それは間違いなく当話者および当域方言の大きな動きを捉えたことになる。しかしそのことが、現実的な変化の一端を担うことと等価であるかについては、さらなる洞察が必要である。表1に見てとれるように、(・)に分類されるものが3発音に過ぎない現状からすれば、それらは音韻論的に確立された1音であるとは見なしがたく、むしろそのような発音が確認されたこと、そうした変化の可能性が示唆されたこと自体をここでは注視すべきであろう。またそうであるとすれば、本

調査に特立する（・）の意味やその変化としての認識の可否も、当話者個人のこととして結論されるものではなく、これ以降の年層者の実態および近接地域の実態を見ていく中で、より明確化するものと思われる。

8. まとめ

新潟県北部には、先に記した地理的事情にもより、「中央日本語の古い発音」とされるガ行入り渡り鼻音が残存する。筆者は、2003年に実施している当域の全区画調査を基礎資料とし、それと本調査を対照させることで、当事象の現状、とりわけ周辺で接する〔ŋ〕域や〔g〕域との影響関係を明らかにしたいと考えている。本稿ではその一環として、前調査段階で既に〔^og〕～〔g〕の発音に揺れのあった1高年層話者を追跡調査し、約10年を隔てての実態を経年比較することを通して、当話者に生じている具体的な動態を探ろうとした。

大局的に見て、その比較からは、いわゆる衰退という括りで統括しうる動きは目立ってはみとめられなかった。とりわけ〔^og〕（〔^oŋ〕）の発音直後に〔g〕のそれがランダムに現れる状況は、（それが前調査における揺れの象徴であったのにも関わらず）、ほとんど変わりばえがないといっている。このことからすれば、当話者にとって〔g〕は、必ずしも〔^og〕や〔^oŋ〕との弁別的な対立を本性とするものではなく、鼻音の介入幅に差がある中で、その加減やタイミングによっては全欠の状況（つまりは〔g〕）にも現れうるといった、程度差に関わる現象だったといえるのかもしれない。

しかし一方で〔g〕は、上記のような理屈を背景として全くランダムに現れるばかりではなく、主に音環境の作用に従い、一定の傾向性を示していることにも注意がある。特に広母音音節の中にとりわけ〔^og〕を安定的に発音するものがあること、逆に狭母音音節の/gi/が突出して〔g〕に現れやすいことなどは、前調査と本調査とでおおよそ一致する傾向として特筆される。おそらくは当域全体においても、このような序列に従いつつ、実相の持続や衰退が展開していることが推測される。

なお本調査では、音響的な特徴から鼻濁音に近似するものがみとめられるなど、数こそ少ないながら、前調査からの新しい動きを予見させる事例が抽出された。「はじめに」にも記したとおり、本稿でのアプローチはあくまで1高年層話者の追跡調査による予備考察的な位置にとどまっている。上記に得られた知見をもとに、以後年代的な、また当域全体にまたがる追究につなげていきたいと考えている。

注

- 『日本言語地図解説』には「山形の一部・新潟北部・紀伊半島山地・淡路島・四国・五島・種子島に、有声破裂音の直前に軽い鼻音を伴う〔^og〕の類が発見されている」（p.1）とある。つまり東日本では山形の一部と新潟北部に〔^og〕の類がみとめられることになる。しかし実際の分布をみると、新潟北部が1・2図ともに〔^og〕（〔^oŋ〕）であるのに対し、山形の一部では1図のみにそれが現れるという相違がある。それらからすれば、『日本言語地図』段階において東日本に安定的に〔^og〕（〔^oŋ〕）がみとめられるのは、ほぼ新潟北部に限られるということがいえる。
- たとえば都築（1949）には、主として〔ŋ〕～〔^og〕（〔^oŋ〕）が分布する新潟県北部、つまりは「越後の岩船郡、北蒲原郡、中蒲原郡、南蒲原郡、西蒲原郡」（p.26）等の地域は、「大體北奥羽の特徴をもつていて」（同）といった記述がある。
- 〔^og〕のそれ以降の変化については、「地方によっては、鼻音を振り落して〔g〕音となり、地方によっては、鼻音の要素と有声音の要素とを一音に融合させて〔ŋ〕音になった」（金田一1954 p.123）ことが推測できる。つまり当域では、以南の越後が前者、以北の東北が後者の道筋を辿って対立していることがうかがえる。
- 『新潟県言語地図』の〔MAP10 嗅ぐ〕を見ると、阿賀北の中北部域を中心にカグとカグ^oの分布が相半ばする中、カング・カング^o・カク等^oの分布が合わせて5地点みとめられる。当地図は、調査時点（1980～1985年）で60～70歳代の土地生え抜き男性を対象としている。つまり当域には、その時点においても明確に、またある程度広範にわたり、入り渡り鼻音の痕跡のあったことがわかる。
- 調査は2003年7月～9月にかけて、阿賀野川以北の27地点、以南の9地点、計36地点の高年層（原則60歳代後半～70歳代）を対象に行った。この36地点は、新潟県の2003年当時の行政区画に従い、各区画より最低1地点をとることを条件に選定したものである。新潟県北部は阿賀野川流域を境に言語状況が大きく変動することで知られ、特にそれ以北では山形県庄内地域との接触もあって、東北（北奥）方言色が強い。よってここに課題とするガ行入り渡り鼻音に関していえば、阿賀野川以南の地域に〔g〕が、以北の地域に〔ŋ〕～〔^og〕（〔^oŋ〕）の漸層的な分布のみとめられることが想定されることになる。
- “b. 鼻音系”のうち、鼻音の介入があるものを、ここではその度合いに応じて〔^og〕と〔^oŋ〕に分類し、それぞれを“入り渡り鼻音”、“小入り渡り鼻音”と呼ぶことにする。先に当事象の現状を「過渡的」と説明したが、その過渡の実際を段階的に捉えるためには、そうした度合いの差をみとめることが有意義だと考えるからである。ただし、それらはあくまで音声レベルでの程度差であり、たとえば同じ鼻音系の中の〔ŋ〕と差があることとは事情が異なる。また程度の差で言えば、実際には〔ŋg〕とも表記されうるほどに鼻音の介入が著しいものもある。しかし、ここではその鼻音の介入が徐々に曖昧化し独立の度合いを落としていく過程に焦点があることから、上記のようなものは〔^og〕の範疇に入れて捉えることにする。
- /gi/が独立して〔g〕に現れやすいのは、当該音節が口蓋化することで/g/の調音が破擦的性質を帯びることとなり、それに付随して鼻音介入の素地が相対的に弱まり

がちだったことによるものと思われる。

8. (・) は表 1 に 3 箇所現れているが、そのうちの「苺」と「おはぎ」は分析の結果、スペクトログラムをうまく抽出できなかった。よってここには「囲碁」の場合に限り例示する。

参考文献

- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編 (1982) 『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
井上史雄 (1971) 「ガ行子音の分布と歴史」『国語学』第 86 集
今石元久 (1997) 『日本語音声の実験的研究』和泉書院
上野善道ほか編 (1989) 「音韻総覧」『日本方言大辞典』小学館
大橋勝男 (1998) 『新潟県言語地図』高志書院
大橋純一 (2000) 「ガ行鼻音」小林隆編『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室
大橋純一 (2001) 「東北方言におけるガ行鼻音の動向」『文芸研究』第 151 集
大橋純一 (2002) 『東北方言音声の研究』おうふう
大橋純一 (2004a) 「福島県相馬市方言における語中ガ行入り渡り鼻音」『国語学研究』43
大橋純一 (2004b) 「新潟県阿賀北地域における語中・尾ガ行音」『社会言語科学』第 7 巻第 1 号
大橋純一 (2005) 「総論」平山輝男・小林隆編『日本のことばシリーズ 15 新潟県のことば』明治書院
大橋純一 (2007a) 「ガ行鼻濁音の実態と評価の変遷」加藤正信・松本宙編『国語論究 第 13 集 昭和前期日本語の問題点』明治書院
大橋純一 (2007b) 「言語接触地域における /i/ /-u/ の実態と分布—新潟県北部方言の場合—」今石元久編『音声言語研究のパラダイム』和泉書院
加藤正信 (1958) 「新潟県における東北方言の音韻と越後方言の音韻の境界地帯」『国語学』第 34 集

- 加藤正信 (1975) 「方言の音声とアクセント」大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語 日本語方言概説』筑摩書房
加藤正信ほか (1994) 「福島県小高町における方言の共通化に関する社会言語学的調査報告」『日本文化研究所研究報告 別巻第 31 集』
岸江信介・吉廣綾子 (2006) 「四国諸方言における入りわたり鼻音について—徳島方言を中心に—」『音声研究』第 10 巻第 1 号
金田一春彦 (1954) 「音韻」東條操編『日本方言学』吉川弘文館
久野真 (2006) 「高知方言の前鼻音」『音声研究』第 10 巻第 1 号
柴田武 (1969) 『言語地理学の方法』筑摩書房
国立国語研究所 (1966) 『日本言語地図』第 1 集
国立国語研究所 (1966) 『日本言語地図解説—各図の説明 1—』
都築通年雄 (1949) 「日本語の方言區別けと新潟県方言」『季刊国語』三巻一号
レイ・D・ケント, チャールズ・リード (1996) 『音声の音響分析 The Acoustic Analysis of Speech』海文堂

付記

本稿は、科学研究費 基盤研究 (C) 「新潟県北部言語接触地域における方言音声の動態—10 年前の全区画調査との比較—」(課題番号: 26370525, 代表: 大橋純一), および科学研究費 基盤研究 (A) 「方言分布変化の詳細解明—変動実態の把握と理論の検証・構築—」(課題番号: 23242024, 代表: 大西拓一郎) の研究成果に基づくものである。